社　会　科

新谷　和幸・中丸　敏至・迫　眞也

1　昨年度までの研究

これまでに行った２年間の研究について，その取り組みや成果と課題を，以下に示す。

【２０１１年度】

①：社会科７年間で育む子ども像の設定

・社会的事象を科学的に追究し，獲得した知識や概念を，実生活や未来に役立つ社会の見方としてとらえ，活用できる子ども

・科学的な社会認識に基づき，社会的事象を多面的に捉え，価値判断・意思決定できる子ども

②：東雲小・中での授業づくりの基盤設定

・「教育内容の論理」に「子どもの心理」を結びつけた子どもの「学び」を育む社会科授業の創造

③：目指す子ども像を基に，授業を通して育む子どもの力の設定

・社会の仕組みやその有用性を実感できる授業を通して，実生活や未来社会に生きて働く見方・考え方を育てる。

④：発達段階での重点と具体的な方針の設定

Ⅰ期「実物の操作や見学等を中心に，単元の主となる学習材から社会の仕組みを捉えること」

Ⅱ期「資料による調べ活動を中心に，単元の学習材から社会の仕組みをとらえ一般化すること」

Ⅲ期「Ⅱ期の内容に加え，社会的事象の価値やそれを取り巻く諸問題をに対し，これまでの見方を総動員し，その中から根拠を示した判断を行うこと」

【上記に沿った実践・研究からの学び】

・④に関しては具体から客観への帰納的なアプローチと，客観から具体への演繹的なアプローチがあり，学習内容や各段階に応じたアプローチの仕方を考える視点が必要。

・小学校は子どもの学びあいがみられるが，中学校でみられない。授業の主体が子どもであることを考えれば，学び合いの視点は必要。集団と個の学習のバランスが必要。

・授業づくりには，小中に限らず２つ大事なものがいる。

①社会がわかるようにすること：具体的にきちんとした教材研究が基盤である。

②教育としての教科経営や学級経営。子どもが学びあい，子どもに訴えるものがあること。

【２０１２年度】

①：発達段階での重点と具体的な方針の変更

Ⅰ期：生活に身近な具体を用い，操作体験する活動に焦点を当てた授業

・事例について調べたり考えたりして分かった知識を一般化する。

Ⅱ期：客観的な資料を用い，集団や個別で考える活動に焦点を当てた授業①

・Ⅰ期に踏まえ，一般化した知識を他の事例に適用して，演繹的に検証する。

Ⅲ期：客観的な資料を用い，集団や個別で考える活動に焦点を当てた授業②

・小学校で育んだ一般的知識を基に具体事例を見つめながら，新たな一般的知識を見出す。

【上記に沿った実践・研究からの学び】

・研究するための問題の所在が明らかでない。東雲小・中の社会科における子どもの課題は何か検証し，それを基にした子ども像，そして学びがつながる授業研究にする点。

・小学校でも中学校でも身近な具体を用い，子ども同士の話し合いを通した授業ができている。社会科の教師３名とも，子どもたちの社会への関心を高めようと努めている。これは東雲小・中の子ども・教師集団のよさである。社会は人と人とのコミュニケーションを媒介としたつながりなので，話し合いを大事にしながら子どもの関心を高めていける学びのつながりを研究するほうが適している。

２　今年度の取り組み

（１）基本的な考え方

○今年度は，昨年度の学びを生かし，まず東雲小・中の社会科における子どもの課題を洗い出し，東雲小・中社会科教員集団の良さを生かしながら，目指す子ども像，課題解決のための手立てを再設定することで，東雲小・中の学びのつながりにおける新たなスタートを切りたい。

（２）社会科授業を通して分かる子どもの課題とその分析

まずは，授業担当している児童へのアンケートや教師自らが感じる課題を話し合うことを通して，学びのつながりにおける課題把握を行った。以下，アンケート調査を集約した主な結果と分析である。

表１．社会科授業に関する意識調査とその結果

	対象	小学４年生【新谷】	小学６年生【中丸】	中学１年生【迫】	中学３年生【迫】
社会科授業への興味・関心	授業が楽しい理由	①社会がわかる ②調べて学べる ③先生がおもしろい ④思考する楽しさ 仲間と学びあえる	①先生がおもしろい ②自分たちで探究できる ③社会がわかる ④仲間と学びあえる	①写真や動画等，インターネットを使うから （アクティブボードの利用） ②先生の話がおもしろい ③発表できる場面が多い	①先生の話がおもしろい ②授業がわかりやすい
	楽しくない理由	①社会科が苦手だから ②発表が苦手だから	①社会科が苦手だから ②勉強が嫌いだから	①なし	①社会科が好きでない。 ②社会に興味がない。
	楽しい授業とは？	①活動できる授業 ②仲間と学びあえる授業 ③社会を学べる授業 ④自分たちで探究できる授業。	①仲間と学びあえる授業 ②関心事を学べる授業 ③熟考・探究できる授業 学ぶ雰囲気のある授業 ※テスト成績につながる授業	①意見を出し合い，自分たちが参加できる授業 ②話がおもしろくわかりやすい授業 ③けじめ・メリハリのある授業	①発表など自分たちが参加できる授業 ②話が分かりやすい授業 ③明るい雰囲気の授業 ④みんなで考える授業
	楽しくない授業とは？	①聞く書くだけの授業 ②社会がわからない授業 ③発表や話し合いのない授業 ④学ぶ雰囲気でない授業	①先生主導の授業 ②学ぶ雰囲気でない授業 ③書く覚えるだけの授業 ④学びあいのない授業 発展・探究のない授業	①淡々と進む授業 ②会話がなく説明だけの授業 ③学ぶ雰囲気でない授業 （私語が多い，静かすぎる）	①淡々と進む授業 ②説明だけの授業 ③意見の出ない授業
社会科授業への価値	授業が役立つ理由	①具体的な単元を通して社会がわかるから ②体験できるから ※受験に役立つ	①将来に活用できるから ②世の中を知ることができるから	①社会に出た時に使えそう	①社会に出た時に使えそう ②一般常識として必要
	役立たない理由	①社会科が嫌いだし覚えてもわからないから	①苦手だから役立つかどうかわからないから。	①学んだことが社会に出た時に使わない役に立たない	①役立つイメージがない ※必要がないから
	役立つ授業とは？	①社会がわかる授業 ②生活を考える授業 ③社会人として必要な事を教えてくれる授業 ④みんなで疑問を出し合い調べ考える授業	①社会を知りわかる授業 ②将来に生かすことのできる授業	①詳しく教えてくれる授業 ②身近な例を用いる授業 ③日常生活と関わる授業	①たくさんの知識を身に付けられる授業 ②身近な例を用いる授業 ③色んな事を考える授業 ※入試で狙われるところがわかる授業
	役立たない授業とは？	①ない ②探究できない授業 ③関心のないことを無理に教える授業 ④先生の介入が多い授業	①ない。 ②既習知識を教える授業 ③単語を覚える授業 ③自分たちの主体性を発揮できない授業 ④教科書通りの授業	①授業と関係ない話ばかりする授業 ②教科書に書いてあることしかやらない授業 ③知っていることしかやらない授業	①覚えるだけの授業 ②無駄話ばかりの授業 ③ない
	社会科が不得意な理由	①予想が難しい ②わからなくなる ③知らないことが多い ④好きでないから	①暗記が苦手 ②テストがよくない	①暗記が苦手 ②テストができないから	①暗記が苦手 ②テストで結果が出ない

※は少数であるが気になる意見

アンケート結果をみると，多くの子どもが社会科授業に対して好意的な意見を持ち，社会科の授業になんらかの価値を見出し学習していることが分かる。しかし，その理由は発達段階で大きく異なる。

「授業の楽しさ」の理由に関しては，教師の特性を除くと，小学４年生で「社会が分かる」点，小学６年生で「学びあいや，自分たちでの探究」を挙げる児童が多く，小学生全体として見ても，この２つの点を理由として挙げる児童が大半である。しかし，中学生になると「アクティブボードの利用した写真や動画，インターネットの活用」など，社会認識形成よりも，社会科授業で用いる具体的な手段に楽しさを見出している。

他方，子どもなりの「楽しい授業」を問うと，どの発達段階も「学びあい，主体的に授業参加する授業」や「社会がわかる授業」など，知的な関わりによる社会認識を挙げている。「授業の楽しさ」に関しては，校種が変わる段階で，子どもなりの授業観と実際の感じ方に大きなギャップが生じていることが分かる。中学１年生では，授業規律など学習環境を踏まえた内容も数多く見られる。

また，子どもが「授業が役立つ」と感じる理由としては，小学４年生が「世の中を知り分かる」点を，小学６年生は，先の内容に加え「将来大人になる上で必要となる」点を挙げている。中学生では，大半が「将来の活用できる」点を挙げており，発達段階に応じた役立つ授業の感じ方が見て取れる。

しかし，実際の「役立つ授業」とは何かと問うと，いずれの段階も認識面に関する回答であるものの，小学校段階では「社会を知り分かる」点，中学生になると「詳しく教えてくれる」点と質的に異なる。

以上の結果と子どもの実態を踏まえ分析すると，東雲での学びのつながりにおける子どもの課題としては，次の通りである。

【社会科における子どもの課題】
社会科授業に関して好意的であるものの，その授業観や社会認識に関する意識が学年が上がるにつれて変容し，社会科に対する関心だけでなく自信も低下している子どもが増えている点。

（３）課題を基にした目指す子ども像とその手立て

なぜ子どもの社会科授業の関心と社会認識との関連性が特に校種間で大きく異なるのだろうか。これまで社会科部で検討した結果，やはり「小学校・中学校での授業スタイルや，時間割などの授業設定上の違いが大きい点」が挙げられる。それを以下に示す。

表２．東雲小・中での社会科授業に関する主な違い

	東雲小学校	東雲中学校
授業スタイル	子どもの学びあいによる課題探究の授業	教師中心の説明によって知り分かる授業
通常の授業方法の具体例	児童が疑問に感じた課題を設定し，個人で資料を活用し予想を立て，話合いを通して吟味・検討し，教師による揺さぶり発問を契機に問題を追究を深め，最後に学習内容をノートにまとめる。	教師が課題提示し，アクティブボードを使って教科書の内容を押えた後，プリントの穴埋めを教師の説明と個人の調べ学習によって追究し，最後に学習内容をプリントの下枠にまとめる。
各校種で授業を行う上での利点	学級担任制なので，学習展開に応じて，柔軟に時間割設定することができる。	各生徒が授業において，発言や聞き取りを柔軟に行うことができる。
各校種で授業を行う上での欠点	年齢が下がれば下がるほど，ノートを取りながら，友だちの発言をきいたり発表したりすることが難しく，時間がかかる。 ６年生のほとんどが受験をするので，社会科で社会を学ぶ意識を維持するがむずかしい。	専科制なので，時間割や　時間数，学習内容の関係上，授業時間や授業展開の融通が難しい。 義務教育を卒業させ，進学させるための教科指導など受験を意識した対応。

当然私たち社会科部では，子どもの社会認識に関して「単語としての知識暗記量の獲得でなく，子どもが社会を知り分かる点」に力を注いで日々授業研鑽している。しかし，残念ながら受験を意識する発達段階になればなるほど，子どもの受験への意識も高まり，成績やテストの得点を気にかけたり，社会科を知識の暗記としてとらえたりする割合が増えている。これは社会科が苦手な子どもだけでなく，得意な子どもに関しても同様である。もちろん，授業では受験のためだけの社会科授業を行ってはいない。

社会を知り分かることを通して学んだ社会の見方や考え方が，受験にも生かされると考える。

学びの主体は子どもである。それ故，知らず知らずの内に，子どもの立場や思いを踏まえ，受験への意識から，社会を知りわかる授業が形骸化しているのかもしれない。

そこで，社会科授業を暗記教科としてでなく，社会を知り分かるための学習として子どもがとらえ続けられるよう，新たに目指す子ども像と研究目的を設定した。

【社会科７年間の学びのつながりで育む子ども像】
「社会を学ぶ知的好奇心」，「クラスという社会で学びを追究する意欲・態度」を持ち続け，高め合える子ども」
－『社会の一員としての役割を自覚し，自信をもって社会で行動できる社会人』の育成を目指す－

【研究目的】
７年間の東雲社会科を通して，子どもが「社会を学ぶ知的好奇心」，「クラスという社会で学び追究する意欲・態度」を持ち続け高め合うことのできる授業づくりを行うことで，子どもの社会認識や社会に関する諸力はもちろん，社会科に対する関心や自信も高められるようにする。

「子ども」が社会を知り分かるための学習を構成するには，その授業構成論はもちろん大事であるが，「子ども」が主体的に学習に臨む意欲や関心を高めることが必要である。その出発点が「社会を学ぶ知的好奇心」ととらえる。「知的」とした理由は，単に見学や活動が楽しい，提示装置がおもしろいという好奇心と区別するためである。

また，「子ども」が学びの主体となるには，子ども自身がクラスという小さな社会を意識することが大事である。社会科は社会を学ぶ授業であり，子どもは未来社会の形成者である。子どもがこのことを意識することはもちろん，社会における自分なりの役割を自覚し，責任をもって行動できる「社会の一員＝社会人」としての資質を育むには，まずクラス社会において，授業の場で課題に対して意見を持ち，クラス社会を形成し合う仲間と共に話し合い，吟味・検討していく学習方法が必要である。

「子どもが学びの主体」であり，「子どもの興味・関心・意欲・態度は，社会科授業で育む知識や諸力とつながり，それらを育む原動力」である。このことを児童も，我々教師も今一度見つめ直していきたい。子ども像の育成を目指し，社会科部が社会科授業における共通確認した内容・方法を以下に示す。

【東雲社会科の共通確認事項（子ども像を育む上で学びのつながる授業を行うための手立て）】
内容：①子どもが社会を知り分かる授業づくり　（「社会認識」を育む授業の追究）
方法：②子どもが学びあい，探究できる授業づくり
（「教師が教える授業」から「子どもが学ぶ授業」への転換）

表３．東雲社会科の授業づくりにおける共通のポイント

手立ての内容方法 ／ 段階	内容：①子どもが社会を知り分かる授業にするには	方法：②子どもが学び合い，探究できる授業にするには
《授業構成段階》	○子どもの知的好奇心をくすぐる課題が生まれる学習材の設定	○子どもが学び合いを通して，課題追究できるような単元構成
《授業実践段階》	○児童の探究が可能となるような教師の揺さぶり発問・資料の準備・板書構成 ○社会を知り分かり学び合えるための，課題設定後の予想と授業・単元終末での振り返りの場を設定	

（４）子どもの知的好奇心，学習意欲・態度を育む場面の焦点化と段階の設定

社会科授業において，児童の知的好奇心や学習意欲・態度を育む場面は多様である。そこで，知的好奇心に関しては，「単元を貫く課題の設定場面」，クラス集団での学びあいにおける学習意欲・態度に関しては，「予想を練り合う場面」に焦点を当て，内容の質的な側面を考慮して表４に５つの段階を示した。いずれも「Stage ３」を①社会を知り分かる授業，②子どもが学びあい探究する授業を形成する上で，ポイントとなる段階とした。

子どもの課題に関しては，先に述べたように，校種が移行する小６～中１の間が大きく変容する段階であり，このつながりをスムーズに行うことが「学びのつながり」のカギと考える。アンケート結果や子どもの発達段階やクラス構成を考え，小５～中１を１つのまとまりとしてとらえることとした。また，その前後も学びをつなげ深めていく上で重要ととらえ，社会科では学校提案通りⅠ期，Ⅱ期，Ⅲ期の発達段階を設定した。

表４の左右には，各発達段階で育むことをねらう課題設定場面における知的好奇心や予想を練り合う場面での学び合いにおける意欲・態度の目安を波線で記した。これを基に，各発達段階における仮説を設定し，授業開発・実践を行っていくこととした。

表４．子どもの知的好奇心，学習意欲・態度を育むための段階表

Ⅰ Ⅱ Ⅲ 期期期	**社会を学ぶ知的好奇心** （課題設定場面）	stage	**クラスという社会で学び追究する意欲・態度**（予想を練り合う場面）	Ⅰ Ⅱ Ⅲ 期期期
	○学習材を学ぶ上での知的好奇心。	1	○課題に対し，自分の考えを表現していく意欲や態度。	
	○社会の変化をとらえる上での知的好奇心。	2	○課題に対し，他者の考えを踏まえ自己表現していく意欲や態度。	
	◎社会の仕組みを学ぶ上での知的好奇心。	3	◎課題に対し，仲間と話し合い，意見集約に参加する意欲や態度。	
	○国内の社会問題の解決に向けての知的好奇心。	4	○課題に対する仲間の考えを引き出し生していく意欲・態度。	
	○地球規模の問題の解決にむけての知的好奇心。	5	○新たな課題を発見・問題提起していく意欲や態度。	

３　社会科７年間の学びのつながりで育む子ども像にむけた授業仮説

今年度の研究仮説と各段階の仮説を以下のように設定する。

【研究仮説】

東雲の社会科授業を，内容面で子どもが社会を知り分かる授業，方法面で子どもが学びあい，探究できる授業とし，そのポイントとなる手立てを踏まえ各段階で授業構成し実践することができたならば，子どもは「社会を学ぶ知的好奇心」，「クラスという社会で学び追究する意欲・態度」を持ち続け高め合うことで，東雲社会科における子どもの課題を克服できるであろう。

Ⅰ期：①東雲社会科の授業づくりにおける共通のポイントを踏まえながら，
②課題設定場面で学習材を通して，社会の変化や仕組みを感じられるような課題を設定し，
③予想を練り合う場面で各自が意見をもち，他者との関わりを通して考えを吟味し，クラスとしての意見を集約できるようにしていけば，
子どもの社会科を通して社会を学ぶ知的好奇心やクラスという社会で学び追究する意欲・態度を高め，社会科を学ぶ意識や自信を育むことにつながるだろう。

↓↓

Ⅱ期：①東雲社会科の授業づくりにおける共通のポイントを踏まえながら，
②課題設定場面で学習材を通して，社会の変化や仕組みだけでなく，日本の社会問題につながるような課題を設定し，
③予想を練り合う場面で各自が意見を持ち，他者との関わりを通して自他の考えを高め吟味し合いながら意見集約でいるようにしていけば，
子どもの社会科を通して社会を学ぶ知的好奇心やクラスという社会で学び追究する意欲・態度を高め，社会科を学ぶ意識や自信を育むことにつながるだろう。

↓↓

Ⅲ期：①東雲社会科の授業づくりにおける共通のポイントを踏まえながら，
②課題設定場面で学習材を通して，社会の変化や仕組みだけでなく，日本の社会問題・世界の社会問題につながるような課題を設定し，
③予想を練り合う場面で各自が意見を持ち，他者との関わりを通して自他の考えを高め吟味し合いながら意見集約し，自分たちで新たな課題や問題を提起できるようにしていけば
子どもの社会科を通して社会を学ぶ知的好奇心やクラスという社会で学び追究する意欲・態度を高め，社会科を学ぶ意識や自信を育むことにつながるだろう。

《参考資料》

木村博一，「初等教育学の構想」『初等社会科教育学』協同出版，2002.
木村博一，「新しい学びにもとづく社会科授業開発の基礎基本」『社会認識教育の構改革-ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発－』社会認識教育学会，2006.
岩田一彦，『社会科授業研究の理論』明治図書，1994.
波多野誼余夫・稲垣佳世子，『知的好奇心』中公新書，1973.
市川伸一，『学ぶ意欲の心理学』PHP新書，2001.